

新約聖書の中の祈り 第20回

□「新約聖書の中の祈り」のアウトライン

1. イエスの祈り
2. 福音書における他の祈り
3. 使徒の働きにおける祈り
4. 書簡における祈り

□「書簡における祈り」・・・パウロの書簡の中から、23の祈りの事例を見る。本日は、第21から第23の、3つの事例。そして、パウロ以外の著者による書簡の中から、2つの事例。あわせて5つの事例を見る。新約聖書の中の祈りの最終回である。

21. 《テモテのための祈り》 IIテモ 1:3 私は夜昼、祈りの中であなたのことを絶えず思い起こし、先祖がしてきたように、私もきよい良心をもって仕えている神に感謝しています。

(1) テモテについて

- ① 母はユダヤ人、父はギリシア人
 - 使徒 16:1 「信者であるユダヤ人女性の子で、父親はギリシア人」
- ② 幼いころから聖書（旧約聖書）を教えられた
 - IIテモ 3:14 「あなたは学んで確信したところにとどまっていなさい。あなたは自分がだれから学んだかを知っており、また自分が幼いころから聖書に親しんできたことも知っているからです。聖書はあなたに知恵を与えて、キリスト・イエスに対する信仰による救いを受けさせることができます」
- ③ 祖母と母がイエスをメシアとして信じた。そして、テモテも続いて信じた。
 - IIテモ 1:5 「私はあなたのうちにある、偽りのない信仰を思い起こしています。その信仰は、最初あなたの祖母ロイスと母ユニケのうちに宿ったもので、それがあなたのうちにも宿っていると私は確信しています」
- ④ 祖母と母、そしてテモテを信仰に導いたのは、パウロであった。パウロが、第1次伝道旅行でリカオニア地方のリステラで宣教したとき（使徒 14:6～23）と推定される。リステラは、テモテが住んでいた町であった（使徒 16:1）。
 - Iテモ 1:2 「信仰による、真のわが子テモテへ」

(2) パウロの同労者となる

- ① 第2次伝道旅行で、パウロはリステラを再び訪問し、テモテを同労者として一行に加えた（使徒16:1~3）。
- ② テモテは、パウロと同じ所で働きを共にするだけでなく、パウロが去った後にもその地方にとどまって働きを続けることもあった（使徒17:14）。
- ③ 第3次伝道旅行でも、テモテは同行した。パウロがエペソで宣教に専念していたときには、テモテとエラストがマケドニアに派遣された（使徒19:22）。
- ④ 第3次伝道旅行の最後は、エルサレムへ。このときの一行にもテモテの名が記されていた（使徒20:4）。

(3) パウロの収監とその後

- ① パウロは、エルサレムで捕らえられ、カイサリアに移送されて収監2年、さらにローマに移送されてここでも収監2年間。テモテは、ローマで拘束されているパウロの世話をしたり、パウロに代わって諸教会に出向いたりしていたようである（ピリ1:1、2:19）。
- ② ローマでの2年間の収監を終えて釈放された後、パウロはマケドニアへ向かった。マケドニアは第2次伝道旅行で宣教した地域である。ピリピやテサロニケといった町に信者たちがいた。そのとき、パウロは、エペソにテモテを派遣した。
 - Iテモ1:3 「私がマケドニアに行くときに言ったように、あなたはエペソにとどまり」

(4) テモテの立場

- ① 使徒ではなく、伝道者
 - IIテモ3:5 「あなたはどんな場合にも慎んで、苦難に耐え、伝道者の働きをなし、自分の務めを十分に果たしなさい」
- ② テモテは、その働きのために少なくとも2回按手を受けた
 - パウロから・・・IIテモ1:6 「私の按手によってあなたに与えられた神の賜物を、再び燃え立たせてください。神は私たちに、臆病の霊ではなく、力と愛と慎みの霊を与えてくださいました」
 - 長老たちから・・・Iテモ4:14 「長老たちによる按手を受けたとき、預言によって与えられた、あなたのうちにある賜物を軽んじてはなりません」

(5) テモテへの手紙第一

- ① エペソに派遣したテモテへのパウロからの書簡（紀元63~66年頃の執筆）
- ② Iテモテ4:12 「あなたは、年が若いからといって」→テモテは何歳か？ 信者となったのは、パウロの第1次伝道旅行（紀元45~48年）のとき、テモテが20歳代前半とすると、紀元63年頃には40歳近い年齢と推定される。

- ③ テモテは、体の強い方ではなく、病気がちであった
- I テモ 3:23 「これからは水ばかり飲まないで、胃のために、またたびたび起こる病気のために、少量のぶどう酒を用いなさい」
- (6) 第二の手紙
- ① 紀元 67 年頃の執筆。パウロは、ローマに戻ったところを再び捕らえられ、ローマでの 2 回目の獄中生活となる。
- ② 死期が近いのを感じながら、テモテに書いた手紙。パウロの最後の書簡。
- II テモ 4:6 「私はすでに注ぎのささげ物になっています。私が世を去る時が来ました」
- (7) II テモ 1:3 に見るパウロの祈り：短い文であるが、この中には、パウロがどのように祈っていたかを示す 5 つのことは見ることができる。
- ① 「あなたのことを思い起こし」・・・テモテのための祈りである。テモテはパウロによって主へ導かれた。テモテはパウロにとって信仰における息子である。テモテをキリストの弟子として訓練してきたパウロが、そのテモテのために祈る。
- ② 「神に感謝しています」・・・感謝をささげる祈りである。神がテモテを導いて福音を受け入れるようにしてくださり、さらにパウロの宣教活動の働きの中にテモテを加えてくださったことを、神に感謝している。
- ③ 「祈りの中で」・・・感謝をささげる祈りであるとともに、テモテのためにいろいろなことを願い求める祈りであった。「祈り」と訳されている原語の意味は、「願い求め」である。
- ④ 「絶えず」・・・頻度の高い祈りであった。「祈り」と訳されている原語も、複数形である。
- ⑤ 「夜昼」・・・時間帯を問わず、テモテのことを思い起こしたときはいつでも、パウロは祈った。
- (8) 祈りの内容
- ① 感謝をささげる祈りであり、願い求めをする祈りであった。
- ② 具体的な内容は記されていないが、この手紙が書かれたとき、テモテはエペソを拠点に伝道者として働いていた。信仰の父であるパウロが信仰の子テモテのために、いろいろなことを願い求めたのである。
- ③ パウロは、各地の教会のために祈ったとともに、テモテのような弟子たち一人ひとりのためにも、夜昼、祈ったことがわかる。

22. 《ピレモンのための祈り》 ピレモン 4 私は祈るとき、いつもあなたのことを思い、私の神に感謝しています。
- (1) パウロが、ある個人、ここではピレモンのために祈っている。
 - (2) 祈りの内容は、感謝をささげる祈り
 - (3) 祈りの頻度は、「いつも」→パウロはピレモンのためにしばしば祈った
 - (4) 祈りの具体的な内容は明らかにされていない。パウロが何か特別なことを祈ったわけではないのかもしれない。そうすると、誰かのために祈るとき、その人の今の具体的な状況を必ずしも知らなくてもよい、と言える。私たちは他の人のことを十分に知らないことはよくある。それでも、その人のために神の守りや導きがあるように一般的に祈るということは、祈りとして成立する。
23. 《祈ってくれるように求める》 ピレモン 22 同時に、私の宿も用意しておいてください。あなたがたの祈りによって、私はあなたがたのもとに行くことが許されていると期待しているからです。
- (1) パウロは、ピレモンたちにパウロのために祈ってくれるよう依頼している。
 - (2) 「あなたがた」・・・ 1節 ピレモン、姉妹アッピア、私たちの戦友アルキポ、ピレモンの家にある教会の信者たち
 - ピレモンは、自分の家で集会を持っていた。「家の教会」
 - 「私たちの戦友アルキポ」・・・コロサイの教会の信者。コロ 4:17 には「主にあって受けた務め」とあるので、コロサイの教会で長老の立場にあったのかもしれない。ピレモンの家の教会も、コロサイにあったと推測されている。
 - (3) 祈りの内容・・・パウロがピレモンたちに祈ってくれるように頼んだ内容は、パウロが獄中から解放されるように。そしてピレモンの家の教会に行くことができるように。
 - (4) 祈りの重要性・・・祈りは、信仰生活においてきわめて重要な意味を持つ。パウロはいつも地域教会や信者たち一人ひとりのために祈り、また彼らに自分のためにも祈ってくれるように求めた。祈りによって神のみわざが進むからである。

24. ≪イエスのゲツセマネでの祈り≫ ヘブル 5 : 7 キリストは、肉体をもって生きている間、自分を死から救い出すことができる方に向かって、大きな叫び声と涙をもって祈りと願いをささげ、その敬虔のゆえに聞き入れられました。

(1) これは、ゲツセマネの園におけるイエスの祈りを指す (マルコ 14 : 32~42)

(2) 祈りの内容・・・願い求め

① 「自分を死から救い出すことができる方に向かって」

- この死は、肉体の死 (=体から霊魂が分離すること) ではない。十字架にかかり、肉体の死を遂げるべきことは、イエスはかねてより、ご自分の使命として自覚しておられ、それを避けたいと思われたことは一度もない。
- ゲツセマネの園でイエスが祈ったのは、十字架の上で霊的な死を受けねばならないと知ったからである。霊的な死とは、神からの霊的分離である。

② マルコ 14 : 36・・・イエスは父なる神に二つの願い求めを祈った。

- 「どうか、この杯をわたしから取り去ってください」。この杯とは、神の怒りの杯であり、その杯を飲むことによってイエスは十字架上で霊的な死を受け取らねばならない。
- 「しかし、わたしの望むことではなく、あなたがお望みになることが行われますように」

③ このときのイエスの祈りの姿勢は、通常の姿勢ではなかった。最初はひざまずいて (ルカ 22 : 41)、次は、地面に両手をつけてひれ伏し (マタイ 26 : 39)、最後には地面に何度も倒れ込んで (マルコ 14 : 35) という苦悶の祈りであった。そして、それを 3 回、繰り返した。

④ イエスは祈りによって恐れを乗り越え、自分の感情を完全にコントロールするに至った。イエスは進んでこの杯を飲み、十字架上で霊的な死を体験した (十字架上の後半の 3 時間、地上が暗黒に包まれた時間)。そして、十字架上で霊的な復活をした【「わが神」(マタイ 27 : 46) → 「父よ」(ルカ 23 : 46)】。その後、肉体の死へ。

(3) 福音書の記事にはなかったが、この書簡によって、イエスのゲツセマネの園での祈りには、2つのことが伴っていたことがわかる。

① 大きな叫び声

② 涙

25. 《正しく行動するために》 ヘブル 13 : 18 私たちのために祈ってください。私たちは正しい良心を持っていると確信しており、何事についても正しく行動したいと思っているからです。

- (1) ヘブル人への手紙の著者は不明。著者がこの書簡を書いた目的は、読者であるヘブル人たち（ユダヤ人信者たち）の霊的未熟さと誤りを指摘し、彼らが直面している危険について警告するためであった。そして、ここまで書いてきて著者は、読者たちに、「私たちのために祈ってください」と記す。
- (2) それはなぜか。祈ることで、私たちの良心は正しく機能するようにされる。良心が正しく働くことで、私たちは正しく行動することができる。そして、私たちが正しく行動することで、危険を回避することができる。
- (3) ここで言う「正しい良心」とは、神のみことばとみこころを基準として判断しようとする良心である。また、「正しい行動」とは神のみことばとみこころに沿って歩みたいと願ってする行動である。その基盤は、神に信頼し、神の愛に応答したいという願いである。
- (4) 祈りは、正しい行動をするようになるための有効な手段である。著者は、読者たちに現状の問題から脱却し、直面する危険から守られてほしかった。そしてそのための道として、祈ることを示したのである。
- (5) 祈りの内容は、19節に記されている。「私があなたがたのもとに早く戻れるように、なおいっそう祈ってくださいよう、お願いします」・・・著者ができる限り早く読者たちのもとに帰ることができるように。著者が拘束されている状態から早く解放されるようにとの祈りである。著者はそのとき、収監されていたのである。